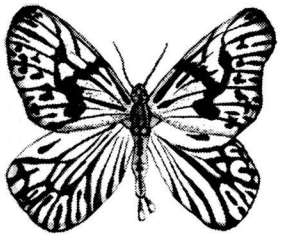
第373号 昭和51年7月20日発行（毎月20日発行）
昭和49年8月31日 第三種郵便物認可

昭和51年（1976年）
7月号（No. 373）
社団法人 日本山岳会
（J. A. C.）
定価一部 150円

目　次

登山とオリンピック
——エベレストの予約席をめぐって——（片山全平）……（1）
ナンダ・デヴィ東・西峰間の初縦走成功……（2）
カメット便り……（3・9）
ウエストンと浦口文治（小野　幸）……（3）
短歌寄稿（山下久男）……（4）
図書紹介……（5）
自然保護情報……（5）
木暮さんの書簡2通……（6）
会員通信・集会報告など……（6）
お知らせ・会務報告……（11）
ルーム日誌・会員異動……（12）

カット／谷アユ子



登山とオリンピック

——エベレストの予約席をめぐって——

片山全平

エベレスト登山の〝予約席〟に異変のあったことは、昨秋カトマンズにとんだ中島寛氏によってもたらされた。七九年春を予定していた英ボニントン隊は、七五年の秋のカナダがキャンセルしたため、ここに割り込んだ。そして見事南西壁ルートを開拓して、スコット、ハストンの両隊員が登頂した。同隊のあとになる七九年にはユーゴ隊が組み入れられたが、その年の秋には英シルバー・ジュビリー隊が、また八〇年春にはソ連がと、いずれも日本隊が交渉中の時期に食い込まれたかたちとなった。

中島氏の説明によると、英シルバー・ジュビリー隊は、いわば銀婚式、一九五三年英初登頂以来二十五周年目の記念事業として、エベレスト財団などが中心となって計画を進めている。

八〇年春のソ連隊は、あの国の登山組織からみて、ナショナル・チームが編成されることが推察される。この年はモスクワ・オリンピックが開催される年でもある。過熱化するオリンピックの規模に対して批判はあるが、ソ連はこの大会に二千億円を投ずると組織委から発表されており、また山岳部門にメダルを出すということが英アルパイン・ジャーナルに報ぜられた。

七四年、田村俊介氏らが参加した第一回国際パミール・キャンプでは、ベース・キャンプの中央広場に各国国旗掲揚台が設置されており、同キャンプを山岳オリンピックと自称し、形式的にはオリンピックを印象付けている。しかし国際オリンピック委員会（IOC）の総会でこれが承認されても、オープン参加である。いわば現在日本の国体で行われている山岳部門と同様の取り扱いを受けることになる。

ソ連とエベレストの関係

これはこれとして、ソ連のエベレストとのかかわりあいにふれる。一九五七年十二月一日付けのコムソモーリスカヤ紙によると、一九五九年中国建国十周年を記念して、中ソ合同のエベレスト登山計画を進めていることが発表された。クジミン（スポーツ功労賞）、プリヤコフ（スポーツマスター）が中心となっているもので、北面のチベット側からであった。

もともと中国の登山はソ連仕込みだ。戦後両国の合同登山はしばしば行われてきた。一九五六年中国の名山、太白山（四一一三メートル）の初登頂では、三十五人の隊員のなかに二人のソ連登山家を送っている。一九五八年にも中ソ合同のレーニン峰（七一三四メートル）登頂があり、一方、その年にエベレストへの中ソ合同の偵察隊が送られ、六五〇〇メートルまで登ったと伝えられる。またソ連単独で北面からうかがったが、大量遭難を出したという噂もひとこと日本にあったが、これは田村氏は否定的だ。ともかくその準備段階のさなか、両国のあいだが険悪となり、六〇年にはソ連のエンジニアーの総引き上げとなって、今日までいたっている。中国隊単独でエベレストに第一次隊を送ったのは一九六〇年、そして、一九七五年春には第二次隊が送られ、いずれも成功したのは御承知の通りだ。

五月モスクワを訪れた田村氏によると、外国からの登山隊の入山でドルもたまったのでヒマラヤへ行くとソ連登山界は張り切っているそうだが、これまで、ソ連国内で行われたロック・クライミング・コンペティションを今秋からインターナショナルなものにし（会場はクリミア）、一ヵ国三人、二十ヵ国に呼びかけ、日本にも呼びかけられている。これまでの国内選手権は、各都市を代表した男女チームであり、それが国際的に押し広げられ、レースのかたちをとることになるわけだ。

登山もオリンピック種目

オリンピックの登山部門でメダルがなかったわけではない。ストックホルムのオリンピック（一九一二年）では、「一九〇八年から一九一一年までのあいだに行われた最高の登山活動に対して金メダルを授与する。この賞に対しては各国とも候補をあげることが出来る」とストックホルムのオリンピック組織委員会から発表された

山をきれいに　ゴミは持ち帰ろう

（AJ一九一一年）。

この結果については報告がない。しかし「アルパイン・ジャーナル一九二四年」には、授賞第一号として同年の英エベレスト登山隊が受けていることが伝えられている。

第三次エベレスト登山隊をひきいたブルース将軍が、インドに向かって出帆する直前に、フランス・オリンピック委員から授賞の連絡を受けた。もちろんブルース将軍は出席不可能であり、一九二二年エベレスト隊に加わったE・L・ストラット氏が、エベレスト委員会から授賞に推挙された。

この授賞は、IOCもフランスのオリンピック委員会も満場一致で採決したもので、二月五日シャモニーのスケート・リンクが閉会式会場となっており、ここで銀のメダル十三個が、英国国歌の吹奏されるなかで手渡された。

当時IOCのピエール・クーベルタン会長から、登山活動に対するオリンピックのメダル贈呈はこれが最初であり、このうちの一個をエベレスト山頂に埋めて欲しいと、成功の期待を寄せると、会場に参集した数千人の関係選手団や観衆から万雷の拍手が湧き起こったといわれる。

英登山界は、このオリンピック最初のメダルに対しては好意的だったことがうかがえるのだが、十二年後、ベルリン・オリンピックになって、スイス、イギリスの登山界はオリンピックの登山におけるメダルの授賞には反対の立場をとるようになっている。

登頂メダルの是非

このころはアイガー北壁初登はんをめぐって、激烈な競演が展開している。そのなかで、一九三五年はゼドゥルマイヤー、メーリンガーの〝死のビバーク〟があり、三六年には、ライナー、アンゲラー、ヒンターシュトイサー、クルツの全員退却中の死があった。

これらの遭難から、「外人のアイガー登はん者は、自国の救助隊を整えて登るべきだ」とする論議が地元からぶちまけられており、メダルに反対した。実際三六年のオーストリア、ドイツ隊のパーティは「オリンピックのメダルをもらうのだ」と北壁登はんに燃えていたことが、そのメンバーたちのあいだで語られていたといわれる。

こうした多発する遭難に対して「登山はスポーツ的な側面は持っているが、それはあくまで第二義的なものである」と、スイス、イギリスの登山界がメダルに反対した。これに対して、ドイツのフォルニッシェ・ベバヒター紙などは「いまの若ものはその意見に耳を傾けるものか」と反論して、賛否両論に分かれた。こうしたなかでは、もちろんメダルの授賞は行われなかった。

日本では、これまでオープン参加だった国体での山岳部門が、各都道府県対抗の天皇杯得点に組入れられるよう検討されている。アイガー北壁登はん争いとは違った登山形式がとられるものの、ソ連が国際山岳オリンピックと自称する国際パミール・キャンプでは、レーニン峰に多くの犠牲者を出している。国体参加は慎重に進めなければならない。

☆☆☆☆☆☆☆

ナンダ・デヴィ東・西峰間の初縦走成功

JACとIMFのジョイントで派遣した日印ナンダ・デヴィ登山隊は、初のナンダ・デヴィ東西峰の縦走を完遂し、世界の登山史上に輝かしき一頁を記した。一九五一年、仏隊がこの計画を企ててから、ちょうど二十五年目であった。名にしおう悪路のリシ・ガンガ峡谷がキャラバンルートのため通信連絡も思うように取れず、途切れ途切れに届いた数少ない隊員の手紙から、苦闘の模様をお知らせします。

△**三月二十一日**▽　長谷川、伊丹両隊員を先発として送り出し、四月十五日、加藤隊員を殿（しんがり）に、全員がニュー・デリーに集結した。遅れに遅れていた隊荷も四月十六日ようやく手にすることができた。現地購入の資材もすべて調達が終わり、出発準備は完了した。今年のニュー・デリーは涼しい。マナリの合宿を終わって、ニュー・デリーに帰ってきたインド隊員の話では、山間地は雪が多いということだ。

雪が多く、ダランシ峠はクローズされていると、IMFは出発を遅くしたがっているが、ニュー・デリーにいつまでもいるのは、財布の都合もあり、一日でも早く山に近づきたいので出発することにした。

△**四月二十日**▽　午後五時、IMF・サリン氏等、多数の見送る中を、トラック三台に分乗して、ニュー・デリーを出発。二十二日夕方輸送中間基地のジョシマートに到着した。周囲の三千メートルぐらいの山にも多量の雪が見られ、キャラバンの難行が予想される。二十四日、ピンジュに指揮された十六名のシェルパと百三名のポーターが一足先にレニ（一八八一メートル）にむかった。二十五日、隊員はトラックでラタ（二一九四メートル）にむかう。ラタからキャラバンを開始する。

△**四月二十九日**▽　ラタ・カラク（三六八八メートル）に到着。普通ラタから一日の行程だが、ポーター不足と積雪が多く、ルート工作が進まないため五日を要した。長谷川、高見、桐生等が、ダランシ峠のルート工作に連日活躍している。伊丹隊員は不調。

△**四月三十日**▽　三日間かかってダランシ峠に四百メートルの固定ロープをつけ終わった。最難所のダランシ峠（四二五三メートル）を、幸い荷物二個を落としただけで、人身に被害はなく、一気に突破して、雪のないデュブリゲータ（三四九九メートル）に到着。冬の北岳バットレス第四尾根の取付きより難しく、冬の不帰岳東面の岩場をトラバースするようだ。一歩誤まれば二千メートルのダイビングで、リシ・ガンガの谷底へ落下する。ポーターたちは、危険な場所では素足になって、三十キロの荷物をかついでくれる。

△**五月三日**▽　キャラバンは細長く点となって、ラマニ（三五九三メートル）に鹿野隊長以下の本隊、デオディ（三二九二メートル）に関ドクター以下四隊員とポーター約九十名、ダランシ（四一四五メートル）にチャンドォラと隊荷三十六個、ジョシマートに隊荷多数という配置。キャラバンは難所の連続で苦しい。

△**五月五日**▽　日本では端午の節句。先発の重広、寺本、チャンド、クサンの四名はBCより一日行程下のサルサ・パタル（四二〇〇メ

ートル）に到着したが、後続がなく、今日と明日はうどんだけの生活が続きそうだ。毎日好天気が続いている。ラマニからの登りは、キャンプサイトのすぐ前から固定ロープが始まり、パタルカンまでの間に七百メートル取付けた。キャラバンと呼ぶよりは、ラタから登山が始まっていると呼ぶにふさわしい状態でネパールなどの経験豊かなわが隊員たちもびっくりしている。

△五月十一日▽ キャラバン開始以来、はじめて全員がサルサ・パタルで一緒になった。ここを中継基地にしてBCへ荷上げが行なわれる。

△五月十二日▽ 高見、重広、P・チャンドとシェルパ二名がBC入りをした。他の一行はサルサ・パタルに停滞だが、キャラバンの難路から隊荷の搬入が思うように進まず、特に高所用品は食糧が一〇%、燃料は二〇%入手しただけだ。自然保護協会が耳にしたら目をむくようなやり方で、あたりのブッシュを手当りしだい刈取ってBCへ運んで燃料にしている。

十五日、ひとまず馴化のできた八名で、東峰へのルート工作を開始する。十八日、六百キロの隊荷が到着。しかし、まだ不足だ。二ュー・デリーからBCまでの輸送は、インド側の責任範囲だが、まったく要領を得ないので、丸尾、磯野、小原等がふたたびジョシマートへ取りに下りる。この隊荷が五月中にBCに上がらなければ、おそらく縦走は不可能だ。ロング・スタッフ・コルにE1（五八七〇メートル）を建設。コル直下は五十度を越える傾斜の氷壁となり、ユマールが必要だ。二十二日、E2（六二〇〇メートル）を建設、ジャンダルムをミラム側にまいてルートを取る。ここまでに約千三百メートルの固定ロープを張った。一方、西峰はW1（五七〇〇メートル）を建設、好天が続いているし、メンバーの士気はきわめて旺勢、元気だ。

△五月二十七日▽ 二十五日から三日間で、磯野等によって、待望の高所用品五十五個が到着。不調の伊丹を除いて、隊員も皆BCに集結した。二十六日、E3（六八〇〇メートル）建設。六月一日、W3（六七〇〇メートル）を加藤、寺本が建設。二日、伊丹がやっと来た。

△六月三日▽ 正午、長谷川がルート工作に成功して、東峰頂上（七四三四メートル）に達した。今トランシーバーが鳴っている。鹿野隊長はいささか興奮気味。高見も着いたらしい。E4（頂上）を建設。今年はモンスーンが早く、すでにボンベイに来ている。あと十日間ぐらいが勝負。インド隊員ではP・チャンドが強い。十日、W4（七五〇〇メートル）建設。十二日、W5（高度、位置不明）建設。

△六月十三日▽ 天気はあまり良くなかったが、長谷川、高見両隊員は、朝五時、東峰を出発し、午後三時、西峰に達して、東西峰間の初縦走を完遂した。P・チャンドを加えた三人の予定であったが彼が不調のため、二人の日本人だけが縦走した。第二隊は悪天候のため中止された。

登山隊は、撤収の準備を始めており、七月一日にはニュー・デリーに帰着するものと思われる。

△渡辺総隊長参加不能▽ 誰よりも訪印を心待ちにしていた渡辺兵力総隊長は、出発直前、健康を害して参加不能になった。現地の指揮は鹿野隊長にゆだね、支障のないように取り計っている。なお、総隊長は国内にあって、従来通り、諸準備を統括している。

おことわり はじめにも記したように、手紙が少なく、不定期であったため、この記事は私信を含めて事務局でアレンジしたものである。書かれた隊員の書き違いや、事務局の読み違いもあって、正確なものではありません。また、縦走前後の情報は、この記事を書いている現在、詳報は未着で、新聞報道、テレックスによって書きました。登山隊が帰国後、間違いを訂正し、詳報が本誌に掲載されます。

（ナンダ・デヴィ登山隊留守本部　堀内幸雄）

トリメッカ便

五月十日ニュー・デリー発、ジョシマート、マラリーを経て五月十九日降雪のなか四六〇〇メートルにBCを建設しました。日印の隊員十名と、シェルパ、ハイポーターが集結し、隊員は高度馴化のためそれぞれC1予定地を往復しています。第一回の合同登山では日本側は何となくお客のような感じでしたが、今回はミーナのリーダーシップのもと全員活溌に動いています。

シェルパはサーダーのジャミッティ・シン（ネール登山学校教官）、アシスタント・サーダーのチェンジェ、ラクパ（一九七三年のカメット登頂者）ほか八名。コックは元登山学校教官で第一次マナスル隊に参加したギャルツェン・ミツェリン（六三歳）とラチミです。このほかローカルポーターから数名をハイポーターとして契約しました。

写真撮影は国境間近であり規制を予想していましたが、許可を得ることができました。

（須田紀子・五月二十日付事務局宛）

なお、五月二十九日付IMF事務局からの連絡によると、二十六日、五四七〇メートル地点にABCが建設されました。またニューデリーとの無線が開通し、連絡が早く容易になったもようです。

＊その後の連絡で、奈須隊員とインド側の二隊員が、アビガミンに登頂した。続報10ページ参照。

（カメット事務局・山口）

ウエストンと浦口文治

小野　幸

つぎにかかげます文は、手塚竜麿著『日本近代化の先駆者たち』（昭50・11・25　吾妻書房発行）の一章であります。著者の手塚さん（一八九八―）は小生の勤務先（東京都庁）の公文書館長などをつとめられ、しりぞかれました。現在は日本英学史学会評議員、日本プロテスタント史研究会に属されておられ、小生には大先輩にもあたります。

ちかごろのように夏も冬も、のべつ幕なしに山登りがおこなわれていると、（山開き）などいうコトバはそらぞらしくきこえるけれ

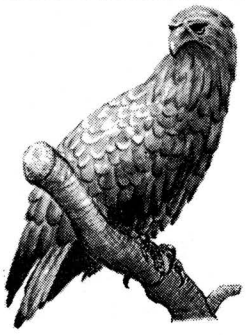
ど、やはり、この行事がすまないと本格的な登山とはいえない。しかし、本来、宗教的行事であった山開きも、このごろは姿をかえている。日本アルプスのウエストン祭などは、もっとも現代化した山開きの新様式だといえよう。けさ（六月三日）のテレビニュースをみると、今年のウエストン祭は二日の午前、例年のように上高地にあるウエストンの碑の前でおこなわれ幾人かの女性によって花束がささげられたあと「雪山讃歌」の合唱が流れた。しかし尾崎喜八老の「上高地をたたえる詩」の朗読は録音されないで残念だった。

登山愛好者でウエストンの名を知らぬ人はあるまい。しかし日本アルプスの命名者であると思いこんでいる人は案外多い。明治五年に来日した大阪造幣局の冶金技師となったイギリス人ウイリアム・ガウランドは仕事の関係で明治十一年七月、外国人としてはじめて飛騨山脈の槍ガ岳に登り「日本アルプス」と称するにふさわしいといった。それがそもそもの起りである。そして、ウエストンは近代的なスポーツ登山の先駆者として中部日本の多くの山々をきわめ、一八九六年（明治二九）ロンドンの書肆から「日本アルプスの登山と探検」を出した。この本が出てから、日本アルプスの名がクローズアップされたのは事実であるが、命名者と紹介者とはあくまではっきり区別しておかなくてはならない。

ウオルター・ウエストン（一八六一―一九四〇）はガウランドと同じくイギリス人である。ケンブリッジで学んだのち来日し明治二十二年から二十八年まで神戸で布教し、一旦帰国したが、三十五年から三年間、さらに、四十四年から大正四年までの四年間は横浜で伝道に従事した。元来、福音伝播会（S・P・G）所属の宣教師で帰国してもウインブルドンその他の教職にあったが、地理学者、民俗学者としても知られ、王立地理学協会の有力な会員であった。

ウエストンの日本アルプス登山は、明治二十四年からはじまる。「日本アルプスの登山と探検」には、二十四年から二十七年までの四回にわたる登山の記録が出ている。岡村精一の訳本は、戦前のものは仲々手に入らなかった。幸い戦後の改訂版が手許にあるのでときどきひもといているが、もう高山には登りたくても登れなくなったいまの私にとってこの訳本は小島烏水、木暮理太郎、田部重治、冠松次郎などの諸家の著作と共に手放せないものとなっている。

ウエストンが明治二十四年以来の日本アルプス登山で一番困ったのはよい案内人が得られなかったことだ。外国人といえば法外な金を要求するという悪習がウエストンを苦しめた。そのようなとき、たまたま、神戸にいた浦口文治がインテリガイドにえらばれたのであるが、このことはウエストンを名誉会員に推戴した日本山岳会のお歴々も長い間知らなかった。同志社関係者のうちには、いまでも知らない人が多かろうと思うので、夏山のシーズンを前に一筆することにした。浦口文治は入学当時、英文科の主任教授で、私にとっては予科時代の恩師だったばかりでなく、東京へ定住するようになってからは、いろいろお世話になった忘れがたい人であるがここでは山岳史上のかくれた人物としてとりあげたいので敬称をはぶくことにする。



浦口文治（一八七二―一九四四）は兵庫県三田（さんだ）の出身で明治二十三年同志社普通学校を卒業、山とのつながりは幼児からながめていた六甲山脈と同志社時代に踏破した比叡、愛宕、鞍馬の山々や天王山、比良山、近江富士などからでほとんど土曜日ごとに出かけていたので、山登りには自信をもっていた。神戸にいたウエストンが、明治二十七年の四回目の登山を前にして、市内に住んでいるクリスチャンで、英語がわかり、健脚でその上コンミッションをとらぬという青年を物色していたが、滅多にはないと思われた。この四拍子揃ったおあつらえむきの適格者があらわれた。神戸組合教会の会員で当時神経衰弱気味でぶらぶらしていた二十二歳の青年浦口文治が副牧師から推せんされ、二か月に及ぶウエストンの四回目の日本アルプス登山に同行することになった。

ウエストンの四回目の日本アルプス登山は、全山系を北から南へ横断するという大がかりなもので彼は一応これを最後の夏山として計画した。このときの記録は「日本アルプスの登山と探検」の第十一章以下に出ている。東京から直江津へゆき、糸魚川から奥地へすすんだ。一行は名古屋在住のカナダ聖公会の宣教師ハミルトンと神戸の浦口文治であることははじめに記されているが旧訳では浦口文治も仮名がきになっていたと思う。昭和九年の十一月に、浦口文治は日本山岳会の小集会で「ウエストンさんと歩んだころ」という講演をおこない、「ブンジ・ウラグチ」がなに人であるかをはじめてあきらかにした。当時同じ立教大学で教えていた浦口文治と田部重治との間に山についての雑談が出なかったら、ウエストンの同行者はいつまでも「神戸のブンジ・ウラグチ」ですまされていたであろう。この集会は田部重治の発意で開かれたらしく、田部老は講演者

第30回ウエストン祭に参加して

山下久男

むらぎもの心は燃えて深き霧
つつめるあたり穂高と仰ぐ
さよふけて霧の流るる神河内
一人し行くをすがしと云はめ
年たけて梓川辺をさまよへば
暁かけてほととぎす鳴く
夜をこめて水上深く辿りつき
しばしまどろむ車の中に

大木操氏に

ウエストンここに佇ちしと八十（やそ）
あまり二とせ翁写真を示す

胸裡（むなぬち）のあつき想ひを傾けて山の
先達雨中にかたる
折からの雨に濡れつつ先達の山
の話にきき惚（ほ）れにけり
白樺の径（みち）をし行けばをみなごの
我に追いつき花の名を問ふ
鈴のごとここだ揺れをる白き花
小梨の花と人ら云ひ寄る
山好む人ら集ひて諸共（もろと）にエーデ
ルワイスの歌をうたひぬ

（昭和51・6・6）

について紹介の労をとられたがそのなかで、浦口さんが山登りをする人だとは長い間知らなかったと不明をわびておられる。このときの講演内容は機関誌「山岳」に掲載された。その別刷は私もいただいてもっている。

さて私は前に浦口文治をインテリガイドと書いたが、ウエストンは記録のなかで「浦口は多少学識のある考古学者である」といい、とくに土地の慣習や迷信の調査に大変役立ってくれたので、山の旅の面白さが二倍になったと書いている。「この多少学識のある考古学者」は、ウエストンにはそうみえたにしても、かつて考古学というものをやったことのない浦口にとっては面はゆいことだった。しかし御岳の頂上で印結びの奥義を根掘り葉掘り神主にききだして、土地の慣習や迷信の調査に協力したことは、登山の民俗学的、地理学的研究に一つの礎石をおいたことになる。

山はただ頂上をきわめ、征服欲を満足させるだけでは無意味である。むしろ山間の村落や周辺のへき地にいって、その土地の民俗習慣をつきとめなければ科学的踏査とはいえない。ウエストンとその案内役であった浦口文治は、はやくからこの点に着目していた。わが国の山岳史上で果した二人の役割は大きかったといえる。英文学者として恩師浦口文治の人間像はいつか筆を改めて描いてみたい。〔一九六三年七月「同志社新報」〕

なお、文中『このときの講演内容は機関誌「山岳」に掲載された』は、「山岳」二十九年三号の「ウエストンさんと歩んだ頃」をさしており、浦口文治の著には「英詩の栞」（明39・9・25英学新報社発行）などあり、墓所は東京、多磨墓地でありますことを付記させていただきます。（五一・二）

図書紹介

山・人・本

島田 巽著

この本のあとがきに「山と人と書物、この三つのもののつながりからのことであった。」と書かれているように、大正十二年に初版が出た槙有恒著「山行」が著者にとって最初の山の本との出合いとなって、それ以後の山と本との出合いについて、読む人にも共感を与えるようなエピソードや引用文をさしはさんで丹念に文章がまとめられている。

著者が日本山岳会に入会五年目の昭和十年には、会の創立三十周年記念事業として山岳図書展覧会が開かれることになり、松方さんを中心として準備がすすめられ、著者もそれに参加していた。その折に『会報』に松方さんから寄せられた「図書展覧会のために」という文章の中にある次の言葉、「幸福なことには手や足で山を攀じること丈けが山岳人の必要条件ではない。然し山岳会はヤングの所謂、『山を登る人のみではなく凡そ山を歩き、或は山に就いて読み、または考える人』の会である。そして山に就いて読むことに関する限り何人もその材料に不足する心配のないことを、今回の展覧会が証明することが出来るならば充分その目的は達せられたという可きであろう。」を著者が引用しているように、著者の考えもここに現われているようである。この本の前三分の一には著者が五十年にわたって出合ってきた、山岳人と山の本とのつき合いがまとめられている。

つづいて、著者が今までに種々のものに発表した「折々の記」「プロフィル」「読後偶感」などの旧稿には付記、追記がつけられるなど、この本をまとめるに当っての著者の細かな神経がゆきとどいている。

著者が数多くの山の本に親しんできた中で、「読後偶感」には一九三三年一月の日本山岳会『会報』に発表した“Alpine Days and Nights”. by W.T. Kirkpatrick をはじめとして『追憶集松方三郎』（松本重治編）まで内外の山岳図書三十編が収められており、著者の山の本に対する愛情がうかがれる。

また、巻末にはこの本の中で触れている山岳関係図書の「書名索引」がつけられ、資料としても役立つようになっている。

一九七六年二月、茗渓堂刊 A五判三七〇ページ 二、四〇〇円

（高遠 宏）

●自然保護情報

昭和51年度活動計画に基づいて次の通り各支部長あてに自然保護委員の設置をお願いした。

昭和五十一年五月二十五日

各支部長殿

社団法人 日本山岳会
会 長 今西 錦司
委員長 渡辺 公平

自然保護担当者の設置依頼について

御承知の通り、当会は山岳地域を対象とする自然保護活動を行なうことを定款に定めて、自然保護委員会を常設しております。当委員会の最近の活動は、既に会報に紹介致しました通り、山梨県が計画していた奥秩父連山での〝連峰スカイライン計画〟（その後、自然公園道路計画と改名）反対の活動があります。幸い、当計画はおりからの政府の総需要抑制政策の下に凍結され、今日に至っておりますが、景気の上向き具合によっては、いつ計画が再燃するか余断を許さない状況にあります。この種の山岳道路建設計画及び類似の計画は全国各地に散見され、当会は、とてもこれらの現状にいちいち対応することはできない事情にあります。

更にまた、登山の際のゴミ持ち帰り運動の展開や、山地の水源汚染防止活動など、多くの取り組むべき課題があります。

そこで、下記の通り、貴支部での自然保護に関する情報収集とその対応策立案などの活動を組織化する為の若くて情熱のある委員を若干名設置願い、自然保護委員会の貴支部在住の委員として活動願いたく存じます。

記

①自然保護委員設置の目的と役割

木暮さんの書簡二通

過日武田家から寄贈をうけたもののなかに、木暮、辻村、梅沢氏ら、古い会員から武田氏へ宛てられた書簡が何通かあった。そのなかでまず木暮さんの二通を御紹介する。第一のは大正十四年十月五日夜（ただし封筒の日付は六日）認められたもので、一読了解されるように『山岳』編集者としての苦労を述べられたもの。次のは大正十五年五月二十五日付のもので、武田さんの質問に対する返書であるらしい。奥多摩の地名山名に関する木暮さんの学殖がうかがわれるもので、貴重な資料といって過言でない。二通共に本郷駒込蓬莱町三一の住所から麹町区富士見町四ノ六宛で、最初のものは巻紙に達筆でかかれ、次のは東京市役所の用箋に墨インキ、ペン書きである。（一九七六年五月九日望月達夫記）

拝復
御端書を頂戴して頗る恐縮する次第に御座候
今年は何処へも出られずおとなしく蟄居致し居り候　恐らく之が常態なのであらふと存じ候も、矢張り不平に候　尤も猛烈といふ程恐ろしい用事には無之候へども、三日と空けられぬやうでは何処へ行くにも張合なく結局出ずに仕舞申候
雑誌も七月に出す積の処、あとに少しも原稿なき為催促もせず印刷所の気侭に致し置き候処、先月漸く出来したる様な訳に候
小生も忙しかったのですぐ校正の出ない方が都合よろしかったので右の次第に候
先日の小集会にて沼井氏に奥羽号の話を致し候処、未だ何の用意もせずとの事にそれこそ猛烈に催促致し置き候　秩父号も僅に大嶋亮吉氏と戸沢氏の両神の記事あるのみにて冠、神谷、岩永、松本の諸氏に執筆を依頼、若しくは先方より申込まれあるも未だ集りたるものは之無候
之も年内にはむつかしくと存じ候　但し年内に今一冊は出したきものと原稿蒐集に悩み居る次第、孰れ新幹事改選と共に今後の方針に就ても評議員諸氏の御意見聴取致し度と存じ居り候
来月にでもなったら多少の閑を得可きかと空だ

●会員通信・集会報告など

(1) 貴支部内における自然保護に関する情報の収集とその連絡
(2) 各種自然保護活動の計画と組織化
(3) 年に何度か全国自然保護委員会及び自然保護懇談会を開催し、相互の親睦と情報交換をはかる。

②任　期

原則として二年、次回からは自然保護委員会の任命という形をとります。

以　上

その結果、六月二十日現在の中間報告として、八支部から十一名の方々を推せんしていただきました。次号でその氏名をお知らせします。

（山本良三）

草津スキー行

報告を書く責任をお受けしながら、なんだかんだでガタガタしていて、だいぶ陽気が暖かくなっちまって申しわけないが、しないよりはまだましかと思い、おくればせながらお伝えする次第である。

今年二月の草津スキーは、御老体のお遊びに加えて頂くのだから、休み半分みたいなことかなと思っていたら、滑降オンリーとはいいながら、いいトシをしてよくもガメツクがんばる方がたばかりと感心してしまった。

以前まる一日かけて往復したところを、途中のリフトで道くさ食いながら二度も山頂付近まで行ってこられるというのは、山のありがた味をなくしてしまうようで、山をじっくり見ている人がいなくなったみたいなのは、山男としては耐えがたい感じだけれども、体力の落ちた分を機械力でカバーして、その気でありさえすればいいところを満喫できるから、もうこの山は来られそうもないとあきらめずにすむところもあって、けっこうう まくいくようになるものだ。

ほんのチョイチョイとした努力で、シュプールのない元白根の山頂をふめたのはもうけであった。しかし七十歳前後の方は行かれなかったのは残念に思う。コースを外して山頂からおもしろそうな斜面を探しながら下るプランを建てていたのだが、今年の雪の少なさでは無理があるために、これはあきらめた。

私がメムバーの最年少であるというのは、ここ数十年間経験しなかったことで、諸先輩をお見受けしたところ、うまくいけばまだあと十五年くらいは山歩きを楽しめそうな気になれてありがたいことであった。

酒のサカナに絶好の、私の好みにピッタリのクリームチーズがあることを知ることができたのは大きな収穫であり、年配者と付き合うことはいいことだとつくづく思い知らされた。

なお渡辺正臣さんが母堂の御病気で、着いた翌朝帰られたのはお気の毒であり残念であった。

＜参加者＞　山崎金次郎(78)、鶴岡元之助(76)、神奈川甚吉(70)、松本熊次郎(68)、網倉志朗(65)、名児耶達男(60)、金坂一郎(56)、西丸震哉(52)、西丸真美（35・非会員）

（参加者年齢平均66）

（西丸震哉）

山形博物館で第一回山下一夫腊葉展開催

すでに渡辺公平氏が当会報で報告されている山形博物館に寄贈された故山下一夫氏の腊葉六万点のうち、このほどようやくその三分の一の整理がつき、去る二月一日より二十九日まで、そのうちの菊科植物だけを集めて、第一回山下一夫「おしば」展が開催された。

この折にぜひ日本山岳会の方たちにと、山形の後藤幹次氏よりお知らせを受けたので、去る二月二十日、植物指導を受けた友人二人と共に、山形博物館を見学する機会を得た。

この腊葉展は山形支部長の後藤

のみ致し居り候　　拝具
五日夜　　木暮理太郎
武田久吉様
付曹

拝復
陸測五万の大日谷は郡村誌には小川と有りて大日谷なる文字は見当らず候　一石山の條を見ると「奥ノ宮大日ノ窟」なる記事を見候も、川はすべて小川を渡り云々、小川の東岸又は西岸云々とあり、之が本名かと思はれ申候　即ち西谷峯より発するもの有之候　新篇武蔵風土記稿には日原の小名の中に大日谷（村居ノ西北岩窟アル辺ナリ）とあれば、其辺の字を大日谷と称せしものか、梵天磐の記事には（大日谷ニアリ岩窟ノ傍大日谷川ノ際ニ峡シキ山に沿ヒテ独立セリ高二十丈余云々）とあれば大日谷川の称もありしか、更に又大日沢川ともあれば、これはダイニチが本当らしく大日像より大日堂大日谷となりしものと考へられ、武蔵名勝図會には……大日谷に至る大日谷沢川の際平地十五六間に幅七八間の中央に大日堂あり云々とあり、頗る御丁寧なるも之は大日谷の沢川の意味かも知れずと思はれ申候　兎に角大日の銅仏あるがもとにて大日谷の称が生れしことだけは確ならんと存ぜられ候

不老沢は確か郡村誌から取りしやに記憶せるも、同誌の抜萃せる分には不老沢なる記事なきやうなるを以て、或は他の何かから採用せしものにや、小生にも不明となり申候　唯山は不老山一名イヤ入沢ノ峯（氷川にて）と有之、日原にて狩鞍（倉トモ）山、境にて小松ガタワと称すと郡村誌には記載致居り、陸測五万の六石山の東北に在るものに当り申候

尚小生も気に懸り居り候もの有之、即ち亀甲山に候が農商務省の地図にては之が今の川苔山らしく、之は誤りとするも新篇武蔵風土記に據れば、西川其中腹より発源すとあるゆへ、どうも高指山（本仁田山、焼多亡山）らしく考へられ、機会ある毎に土民測量を試みしも未だ確むること能はず、遺憾千万ほどではなくも十万以上に感じ居り候之に就て何かお聞込の事も候や尚御心懸置願上候

明日は先ず雨丈はふりさうもなくと思はれ候へば、今夜出懸けて例のサイハイを尋ねて見んかと思案最中に御座候　草々

五月二十五日　　木暮生

武田学兄
梧下

＊　＊
＊

幹次氏の友情による橋渡しと、前結城博物館長の鑑定や、現佐藤館長のご理解および吉野学芸員の熱意などによって立派に展示されたもので、埋もれていた宝物が、ようやく世に出て光を放ったような感激であった。

その夜博物館側の皆様ご出席のもとに開かれた後藤旅館での座談会では、良い資料が山形博物館に保存された喜びと、山形に後藤氏という良き友がおられたことが動引力になった結果ということであった。現在では採集禁止の植物も多く、他の博物館や大学研究室でも入手できない貴重な資料も含まれていて、その正確な整理方法や名前や属名などが間違いのないのに驚かされたと話しておられたが、いつこのような研究をされたのかと不思議がられ、素人としての植物研究に功績の大きかったことが讃えられた。

山形博物館は山形駅から車で五分ほどの霞城公園の中にあって、元聯隊跡の広場が前庭にひろがっているので、月山、朝日連峰など東北の山なみが眺められる素晴しい環境であった。山と植物に半生をかけた山下氏の腊葉の落ち着き場所としては、東京より良かったのではないかと二人の友と喜び合った。

翌日は晴天に恵まれて久しぶりに地蔵岳に登り、その夜後藤氏に感謝しつつ帰京した。（坂倉登喜子）

三水会第六回
箱根現地集会報告

三水会、三月の現地集会は、去る三月二十八日、箱根・仙石原の竹友荘で開催された。

当日はあいにくの曇天ながら、会員有志それぞれ定刻の十二時過ぎには参集。

少憩ののち、予定通り深良水門と湖尻峠までハイキングに出かけたもの三名。他は季節はずれの水浴ののち早くも献深会と昏寝会。

午後七時頃、全員そろったところで、あらためて懇親会がはじまった。

松本氏のカオで特別料理も提供され、松田氏の二世も加わって、なごやかに話しははずみ、楽しい一夜を送った。

翌二十九日は、前夜よんどころない所要で帰られた三氏、一児を除き、献深会を再開、貴重なる体験談を拝聴しつつ、十二時を期し筆者は小雨の中を退散した。

したがってその後の経過は不明。

＜参加者＞山崎金次郎、松本熊次郎、高橋照、名児耶達男、沼倉寛二郎、網倉志朗、松田雄一、同氏子息、高田真哉

（計九名順不同）

（高田真哉）

売場ご案内

特製限定本の在庫があります ✠雪原の足あと・付録2号淡彩花の絵（坂本直行）25,000円
✠いろりばた（南会津山の会）8,500円
（お求めは直接茗溪堂お茶の水店へ）

最新入荷の本

✠越後の山旅・上巻—山名地誌など文献資料豊富な山の案内紀行（藤島玄）1,500円
✠台高山脈の谷・上—140に及ぶ、沢と谷の実地踏査による案内（大阪わらじの会）2,000円
✠わが北壁の記・星野隆男追悼集—北壁三冠王として34年の生涯を終えるまで—800円
✠ダウラギリVI—関西登高会1970ヒマラヤ登山報告書—付3色地図（関西登高会）2,200円
✠登歩渓流1975—報告越後水無川ほか（登歩渓流会）1,200円 ✠ほか……

茗溪堂
〈山の本の売場〉お茶の水店三階
営業時間平日・午前10時30分より午後8時
日曜祝日・午後0時30分より午後6時30分

JAC絵画展の提案

JAC図書委員会

図書委員会は従来「この一本展」や山書交換即売会などを主催してきました。これらの催しが好評裡に実行されたのは、ひとえに会員諸兄姉の御協力のたまものです。

このほど図書委員会では、あらたにJAC会員の手による絵画展を企画いたしました。会員各位の趣味の多様化を反映して、多くの方々が山行に画帖をたずさえておられるようにお見うけします。たとえ葉書の半面への小さなスケッチなり、あるいは油絵の大作なり、形式はいっさい問わずにまったく自由な、そしてたのしい展覧会を開きたく思います。

当面はJACのルームを会場にあてて年内に下見の会をもうけ、来年早々にしかるべき公開の展覧会場（日本橋丸善を予定）において山岳人絵画展を催すべく検討中です。

具体的なことがらはいずれ会報にて発表いたします。ふるってご協力下さいますようお願い申し上げます。

出品ご希望の方はその旨JAC図書委員会あてお知らせ下されば幸甚です。

雪崩勉強会へのお誘い

遭難対策委員会
指導委員会

雪崩による遭難があとを絶ちません。前途有為の青年が毎年失われています。

雪崩は現在のところ学問的究明が進んでいないため、特効薬のような予知法もありません。しかし登山技術の面から遭難予防する可能性はなきにしもあらずです。むしろ今までの遭難は徒死に近いものが多いということができます。

しかしながらその予防法の実行は、決して容易なものではありません。何がその妨げになっているか、大体の見当はついていますが、こうしたことを究明して、すっきりした遭難予防対策を確立したいというのが今回の勉強会の目的なのです。

今回は講習会ではありません。参加者による自主的研究会です。従って積極的態度で会を推進してくれる人の参加を希望しています。世話人は講義をするわけではなく、必要な資料や集会の世話を任務とします。

さしあたっての運営としては、参加者に予め資料を送付、その内容を検討して頂いた上で月一回程度の集会を行いたいと思います。それ以後のことは参加者と相談しながら運営したいと思います。

申込要項

㈠参加資格
右の主旨に賛同する人
現役登山者またはその指導者
積雪期登山を四年以上経験した人

㈡人員　一五名

㈢締切　8月15日（葉書に住所、氏名、年令、電話、所属山岳会明記のこと）

㈣会費　実費負担（とりあえず前金とし三千円）

（世話人代表、金坂一郎）

山研（上高地）オープン!!

まばゆいばかりの新緑につつまれた上高地山研は、五月二十二日（土）よりオープンいたしました。

山研運営委員会では、千葉保之、宇田川芳伸、若手委員を加え、今年こそは、独立採算に一歩近づくために努力したいと願っています。そのためには、岳人のやすらぎの場として、また研修の場として、こころよくご利用いただけるよう心がけていくつもりです。

「山」四月号でお知らせしました規定のなかで、一部変更があります。

昭和五十一年五月理事会承認

第五条　山研使用者は管理運営費として次に定める料金を支払うものとする。

のなかで非会員　二〇〇〇円を二三〇〇円としました。なお、食事は原則として自炊ですが、管理人に申し出れば、一食（御飯、味噌汁）三〇〇円でまかないます。

申し込み方法は、本部事務局または、当日宿泊可能の場合は、山研に直接お申し込みください。

（山研担当理事　小倉）

山研利用状況
（49年と50年対比）

	49年度	50年度
5月	／	17名
6月	35名	60名
7月	14名	86名
8月	160名	220名
9月	53名	61名
10月	88名	127名
11月	7名	18名
	357名	589名

カナディアン・ロッキーとマウント・レニアへ登頂のツアー。

本会々員の黒川恵君が今夏、カナディアン・ロッキーの氷河の峰マウント・アサバスカ（三四三六メートル）やワシントン州の氷河と万年雪の山マウント・レニア（四三二三メートル）へ登頂するツアーを企画しています。カナディアン・ロッキーは七月二十三日発十八日間、三八〇、〇〇〇円。八月六日発九日間、三五五、〇〇〇円。マウント・レニアとヨセミテは八月十二日発、十六日間一四六、〇〇〇円。

連絡先　〒156東京都渋谷区宇田川町12－3ニュー渋谷コーポラス八一一号　電話〇三－四六四－四三五三　㈱ロッキーツアーズ　黒川

関田美智子さん

五月三日九時半頃、関田さんが間ノ岳、天狗のコル間で転落。同行者の連絡で、御両親が岐阜県警に捜索願いを出された由、電話が入った。その後連絡がなく案じているとのことで、早速西穂山荘の村上氏に電話したところ、遭難事故が相次いで起こっているので、県警の課長が、新穂高登山センターに来ているので、問合せれば様子がわかるだろうと云われた。自分でダイヤルを廻したい気持をおさえて対策本部に連絡する。

ネパール、ボリビア、アラスカの峰々に足跡を残した関田さんが、こんな事で死ぬはずがない。祈るような気持で、後は仕事も手につかず、立ったり坐ったり、地図を眺め、電話の廻りをうろうろするばかりだった。

関田さんは昨年十一月、婦人部の方々と浅草岳登山と懇親会を兼ねて、私共只見ユース・ホステルに二泊された。夜のひとときア

ルコールに弱い二人が、ウイスキーをなめながら、久々に話しあった。そして今年のお正月、突然関田さんから電話でスキーに行くからと、友達と二人で一泊していかれた。翌朝帰りしなに「いつもあわただしくて済みません。また今度ゆっくり遊びに来ます」といってモーターボートの募金箱に寄付をして下さった。「何年先かわからないけれど、モーターボートを買ったら、真先に人のはいらない山へ御案内します。お互い足腰丈夫なうちに」といったら、大きな瓶の底にちょっぴり入った募金を眺め、目を細めて独特の笑い声を残して去っていった関田さん。亡くなった五日後、田子倉湖に小さなモーターボートが進水した。でも真先に乗せてあげると約束した関田さんは、帰らぬ人となってしまった。

四日、遺体は収容され、その夜新平湯の禅通寺でお通夜、翌日お葬式、そしてだびに付された遺骨はその夜遅く帰京されたそうである。十六日、両国の自宅で、御葬儀が盛大におこなわれたとのこと、とうとうそのどちらにも行けなかった私は、遠くから御冥福を祈るばかりである。（斎藤多美子）

ケニス・メイスン教授

"Abode of Snow"（邦訳『ヒマラヤ』）の著者として、わが国のヒマラヤニストにも名の知られたメイスン教授は、去る六月二日静かに息をひきとったと息子さんのフランシス・メイスン氏から伝えてきた。一八八七年九月十日の生れだから八十九歳に近く、天寿をまっとうしたと言っても過言でなかろう。

昨年四月に『ヒマラヤ』の第二版を刊行したとき、その旨を伝えたところ、非常に喜んで返事をよこしたが（五月七日付）、それには「私は六十五年前にアルパイン・クラブの会員に選ばれたのだから、最も古い会員の一人だろうし、ヒマラヤン・クラブの創立会員でも最も古い。私はいまでは家の階段を登ることさえできなくなって、山の憶い出にのみ生きているが、その回想と古い山友だちの楽しい憶い出は私に十二分の幸せをもたらし、現代のわずらわしさを一時的にも忘れさせてくれる。……今ではもう古くなった一九五五年（"Abode of Snow"の発行された年）以来、ヒマラヤで成し遂げられた業績は枚挙に遑ないが、若し私が書き残しておかなかったら、その初期の歴史は忘れ去られていたかも知れない。私は、一八六〇年の昔にヒマラヤやカラコラムの地図を作ったゴドウィン・オースティンを実際に知っていた唯一人の生存者であったと思う。……今日はエリザベス女王が日本にお着きになる日だ。カラーテレビでその光景が見られるのは、何と素晴しいことであろう。」と書かれていた。昨年のクリスマス・カードが最後の便りになったが、それには At my age 88, I am no longer active, but I keep going! とあった。

一九二六年のシャクスガム探検にたいしてイギリス地学協会から名誉あるゴールド・メダルをおくられ、ヒマラヤン・クラブの創立に尽力し、『ヒマラヤン・ジャーナル』の名編集者として十八年間も在任した。この先駆者の遠逝にたいし心から哀悼の意を表する。（一九七六・六・二〇　望月達夫）

会費納入のお願い

昭和五十一年度の会費をまだ納入されていない方がおられます。銀行振込み、郵便為替、現金書留のいずれの方法でも結構です。お早く納入ください。なお、東京及び近県在住の方は、納入かたがたこの機会に山岳会ルームにお遊びにおいでください。

＊東京都及び千葉、神奈川、埼玉県在住者　八五〇〇円
＊その他の府県在住者六〇〇〇円
＊国外在住者　25米ドル
＊銀行振込み　三和銀行本郷支店
＊郵便振替口座　東京三―四八二九

阿岸充穂氏

六月四日午前七時、米国オレゴン州クラマスフォールズの飛行場で、写真集『大地の唄』撮影のための機材搬入中、セスナ機のプロペラに巻きこまれて死亡。会員番号五九三六の同氏は、ロサンゼルスをベースにし米国西部、アラスカの大自然を主題にした写真を数多く発表、中堅写真家として嘱望されていた。

今夏は、北海道学芸大学山岳部OBとともにアラスカのフェアウエザー峰遠征に隊長として参加する予定で、その準備や日本での写真展開催の打合せにこの春一時帰国、四月の日本山岳会総会にも顔をみせていた。享年四十二歳。

●訂正

＊「山」五月号の「鳳凰山地蔵仏第二登の記録」について野尻抱影氏から山崎氏宛、左記のような訂正申入れがありました。

「山岳会々報」興味深く拝見しました。小生は、一時外様格に扱われましたが、入会せずに終りました。御引用の文を訂正しておきます。――

一、大島協三は大島隣三　大島健は大島正健

四「大体こんな次第で地方の岳人は……」は「地元の……」

「大島氏らは多分この記事から……」はちと推理過剰、彼等は時々鳳凰へ登り、遠望してゐるので、地蔵仏に登ってやらうと思ひ、そこへ小生が、外人が登ったと話してゐたのがきっかけとなったらしい。山岳会の存在も知ってゐない年少学生でした。　以上」

＊「山」五月号の「七星山雨情」の中の北斗温泉は、北投温泉の誤りでした。北斗というのは台湾中部にあります。七星山で北斗七星というわけで、北斗と書いてしまいました。なお、台湾大学の学生が遭難したのは今春ではなく、昨春（昭和五〇年）になります。大変失礼しました。（門倉）

カメット便り続報

六月十五日ミーズ・コルにC6を建設、十六、十七両日頂上をアタックしたが強風と膝上までのラッセルで断念。十八日、北側のアビガミン峰（七三五五米）に、バーディ、エイトワル、奈須文枝の三名が登頂した。合同隊は二十四日BCを撤収。詳細は追って報告しますが、ご支援を感謝します。

昭和五十一年七月二十日発行
113 東京都文京区湯島一―六―一
利根川商事㈱さくらビル
発行所　社団法人　日本山岳会
発行者　今西錦司
編集代表　大森久雄
（813）二二八六（代表）
振替口座東京三―四八二九番
東京都港区赤坂一丁目三番六号
印刷所　株式会社　技報堂

登山・スキー用具専門店

山の店

大阪市北区梅ケ枝町101
TEL. 06(362)5736

●買い易い
山の店

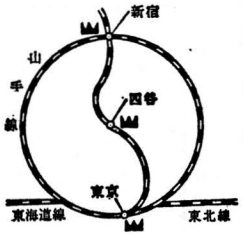
●北へ来たら
山の店

●フレッシュな
山の店

山とスキーの専門店

片桐

東京都文京区湯島3丁目38－9
片桐盛之助
電話 東京(831) 1794・6680番



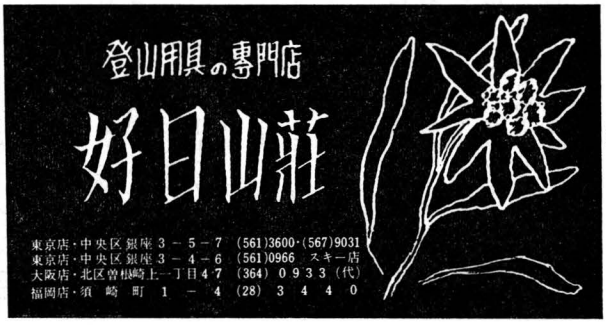
四谷店 東京都新宿区三栄町三番地
TEL (351) 7432・1912
八重洲口店 東京都中央区八重洲二の五
TEL (271) 1560・8575
新宿店 新宿ステーションビル四階
サービスショップ
TEL (352) 6564
日本信販加盟店

山友社 たかはし

登山とスキー具

イワタ

東京都中央区日本橋通2－1
PHON; 271—7686・1718



北の風物とともに奏でる
香り高い坂本直行の
画文集！

雪原の足あと

30年間の開拓事業を止め、絵筆を握る生活に大転換した時期の画文集。B5判 206頁 定価 3,800円

原野から見た山

柏の樹林と日高の山波に囲まれた原野での開拓の傍ら、電灯もなくランプの燭光の下で生まれた楽しい画文集。B5判 144頁 定価 4,200円

淡彩画絵はがき 北海道の山・原野・花

桐の実・初冬の中部日高・むしゃりんどう・まゆみ・おおめしだ・大雪山黒岳。6枚1組 300円

日本の山旅

足立源一郎スケッチ帖 日本列島北から南まで、さまざまな風景が淡彩の筆で、いきいきと描き出されている。A変型判 200頁 定価 3,600円

1976年版 山日記

日本山岳会編 山好き同志の贈りものに！しゃれたプレゼントカードがつきました。A6ポケット判 定価 950円

近刊

グリンデルヴァルトの山案内人たち

サミュエル・ブラーヴァン著 井手貴夫訳 日本の近代的登山と深い関わりのあるグリンデルヴァルトのガイドや案内人組合の歴史、組織等を語る。

茗溪堂の出版目録送呈 ●お買上げ、ご注文は最寄り書店でどうぞ！

茗溪堂 〒101 東京都千代田区神田駿河台2の1 電話 03-291-9442 振替東京 8-24723

・お知らせ

国際アルピニスト集会参加要請の件

海外連絡委員会

フランス山岳連盟主催の、二年ごとにシャモニで開催される国際アルピニスト集会の参加を、左記のごとくルイ・ジュヴリル会長の名に於て本会宛に要請してきましたのでお知らせいたします。

場所 フランス、シャモニ、フランス国立スキー登山学校。

期日 昭和五十一年七月十九日より八月五日まで。

人員 各国より二名（フランス在住のものは認められない）

資格 三十五歳以下で技術的に優秀と認められ（ヨーロッパアルプスの五級以上の岩場の登はん可能なもの）、現在も実際的に登山を行っているもの。また、二名のうち、一名はフランス語を理解するもの。

滞在費 無料（現地までの交通費は各自負担）。

第5回穂高涸沢テント集会

恒例となりました青年懇談会主催の涸沢テント集会を左記の要領で開催致します。今年もふるってご参加ください。

期日 8月8日（日）～8月15日（日）まで。8月14日は上高地山研にて親睦会。費用は別途。

場所 穂高涸沢JACベースキャンプ

テント宿泊料 一人一日一四〇〇円（二食付）

参加者所持品 米一日0.5Kg（三合）×宿泊日数、食器2個、シュラフ、その他宿泊、登攀用具。

申込先 日本山岳会青年懇談会 電話03－813－2286

テントの都合もありますので人員、宿泊日等、事前に連絡下さい。

第19回紅葉会

期日 51年11月6日～7日（第1土曜日）

会場 懇親会 富士山麓大渕丸尾自然公園内、山小屋、寝具準備する。翌日山行。車で富士登山道を登り、宝永第一火口壁まで下り、第二、第三火口壁を伝って下る大昔の富士登山道の、美しい御殿場の秘境を下り、富士周遊道路まで歩きます。集結後、車で東名バス富士インターまたは東海道線富士駅まで送ります。雨具持参登山姿で集って下さい。昼食は握りめしを用意します。

会費 吉原駅から懇親会、宿泊、車代を含め、五〇〇〇円。

集合 11月6日午後二時までに、東海道線吉原駅南口に集合。

参加希望者は申込金二〇〇〇円を同封、住所、氏名、年令、性別、会員番号、自宅電話番号を明記して、支部宛申込まれたい。来年は20周年になり、19回参加者を優待したい方針です。参加多数の場合は山小屋の収容能力もあり、定員になり次第締切らせていただきます。60名ぐらいまで。本年は久し振りに山小屋の雑魚寝ですのでその積りで参加して下さい。

追加 連絡は参加申込者だけにいたしますので、会報見落しの友人にお知らせ下さい。なお、20周年記念には、赤石岳の石を使って、グイ呑を焼く予定でおります。

図書委員会行事予定

6月26・27日 懇親山行 谷川岳
9月22～26日 懇親山行 北鎌尾根 以上二項、委員外の参加可
10月23日 図書交換会 本会にて
11月 上高地集会（山研委員会と共同、日時未定）
12月18日 忘年会 JACルーム
1月15・16日 スキー懇親会
2月15日 山岳図書を語る夕 JACルーム 岡 茂雄氏
2月下旬～3月上旬 絵画展 東京丸善
3月17日 山岳史懇談会学習院山岳部の足跡を語る・加藤泰安氏 ほか

集会委員会行事予定

6月21日 植村直己氏北極単独行報告会
7月20日 ダウラギリ四峰（カモシカ同人）
8月20日 女子カメット隊報告会
8月30日 ナンダ・デヴィ報告会
9月2日 スケッチ教室1
9月9日 スケッチ教室2
9月10日 神奈川岳連ローツェ報告会
9月16日 スケッチ教室3
9月20日 パミール登山隊報告会
9月26日 スケッチ教室・現地
9月30日 武蔵大・どんぐり山の会、マッシャブルム報告会
10月3日 集中登山
10月5日 各国山岳会情報
10月20日 会員会議
11月11日 教養講座
11月21～23日 富士山（指導委員会と共催）
12月17日 忘年会（婦人懇親会と共催）
12月19日 もちつき大会
1月15・16日 スキー親睦会
2月3日 ヨーデルの会
2月20日 ワカサギ釣りの会
3月20日 支部懇談会
3月26日 オリエンテーション

8月28日午後四時より本会ルームでビールパーティーを行ないます。参加をお待ちします。

会務報告

5月理事会

5月7日午後6時30分、本会ルーム

▽**出席者** 今西会長、織内、望月各副会長、浜野、高遠、近藤、小倉、山本良、皆川、大倉、黒石、田村俊、神崎、橋本、浜口各理事、浜野、折井、宮下各評議員

委任 山本健、原、浅田各理事

▽**議案**

・昭和51年度理事の担当の件（浜野）各担当は昨年と同様。

資料管理担当 浅田理事、支部担当（追加）神崎理事

常務理事（追加）神崎理事 了承

・明治大学ヒマルチュリ登山隊推薦状交付願いの件（橋本） 承認

・UIAA総会開催の件（田村俊）一九七八年開催意向を出してUIAAと接触 了承

▽**報告事項**

・山研運営 （小倉）
オープン5月22日

・山岳編集 （近藤）
70年記念号準備中

・集会 （神崎）
5月、6月集会予定

・婦人懇談会 （黒石）
カメット登山隊29日出発

婦人懇談会、図書委員会委員関田美智子氏が5月3日穂高岳で遭難死

・指導 （大倉）
17回登山技術研修会 岳沢5月22日～24日

ルーム日誌

7日（金）理事会
10日（月）集会委員会
11日（火）指導委員会
12日（水）学生部
13日（木）学生部
17日（月）集会委員会、指導委員会
18日（火）婦人懇談会
19日（水）三水会、学生部
20日（木）図書委員会
24日（月）集会委員会
26日（水）学生部
27日（木）ナンダ・デヴィ委員会
28日（金）自然保護委員会
31日（月）集会委員会

今月の来室者三四七名

会員異動（51・5）

物故者

五九三二　関田美智子（51・5・3）
六九四八　石川紘一（51・1・27）
一九六一　城谷一誠（51・4・26）

退会者

五五三七　佐藤栄之助（51・5・7）
六四六三　桑原武彦（51・3・31）

支部変更

五三四〇　北川豊培　関西支部

終身会員

一五二六　山本敏三（51・5・8）